

もしも昨日が選べたら

2006(平成18)年8月15日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督＝フランク・コラチ／出演＝アダム・サンドラー／ケイト・ベッキンセール／ジョゼフ・キャスタノン／テイタム・マッキャン／クリストファー・ウォーケン／ヘンリー・ウィンクラー／ジュリー・カヴァナー／デヴィッド・ハッセルホフ／ショーン・アスティン (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2006年アメリカ映画／107分)

第2章

発想の面白さで見せる

……「もし自分の生活を自由にコントロールできるリモコンがあったら……」というアイデアが、この映画の出発点。早送り、巻き戻し、一時停止、そのうえ音量調整や同時画面ができればそりゃ便利なもので、人生が一変することまちがいない……。ところが、その万能リモコンがいつしか持ち主の意思を離れて、自動で持ち主の人生をコントロールすることになれば、そりゃ大変！ 原題の『CLICK』に対する邦題には実に深い意味が込められていることが、映画を観ればわかるはず……。さて、あなたは「もしも昨日が選べたら」どんな人生を……？



全米で大ヒット！

プレスシートには「全米初登場No.1」として、2006年6月23～25日の公開3日間の全米興収4001万ドルと書いてある。そして『キネマ旬報』8月下旬号も同じデータを掲げ、「これでサンドラーは、ここ5年間いずれの主演作も滑り出しで3000万ドルを超える売り上げを達成したことになる」「これは、トム・クルーズやトム・ハンクスですら成しえていない、とてつもない偉業である」と書いてあるから、本当にすごいもの(175頁)。

もっとも、作品評については、「批評家からは、まるで……との言い方で多くの作品が言及されている」「要するに独創性に欠けるというわけである」と書かれているが、さて……？

原題と邦題のどちらが好き……？

『もしも昨日が選べたら』という邦題は、そのタイトルだけで映画の内容が予測できるもので、かなりいいセンス。これに対して、原題は『CLICK』。「コンピューターのマウスをクリックする」という時の「click」だが、本来は、かちっ（と鳴る、鳴らす）、という意味。また、「clicker」になるとリモコン装置の意味になる。

この映画が誕生したのは、「もし自分の生活を自由にコントロールできるような万能リモコンがあったら……」というアイデアによるもの。したがって、原題はアメリカ流にこの映画の本質をズバリと言い当てているが、邦題の方が情緒があることはたしか。さて、あなたはそんな原題と邦題のどちらが好き……？

主人公とその家族は……？

日本では昨年11月に勃発した「姉齒騒動」以降、建築士は肩身の狭い思いをしている（？）が、アメリカで大ヒットしたこの映画は、建築士のマイケル・ニューマン（アダム・サンドラー）が主人公。といっても、彼は社長のアマー（デヴィッド・ハッセルホフ）からその才能と頑張る気持をうまく活用（利用）されているため、「仕事の虫」にならざるをえない状況。日本では、朝早くから夜遅くまで会社のためにがむしゃらに働くことは一種の美德であり、家族を犠牲にすることもやむなしという価値観がまだまだ根強いが、家族を大切にするアメリカではそれはダメ……。

したがって、家族のために一生懸命働いていると主張し、いつも家庭より仕事を優先させているマイケルに対する、美しい妻ドナ（ケイト・ベッキンセール）の反論は、「出世したらもっと仕事が忙しくなるだけではないか」というもの。したがって、どうも「夜の生活」も今はあまりうまくいっていない様子……？さらに、2人の間にはかわいい息子のベン（ジョゼフ・キャストanon）と娘のサマンサ（テイタム・マッキャン）がいるが、子供たちが楽しみにしているキャンプをカラ手形にしたり、必ず見に行くと言った水泳大会に遅れたり……。これでは、妻のみならず子供たちも欲求不満状態に……。

運命を変えた万能リモコンとの出会い！

マイケルが「共通リモコン」を買うためにある店に行ったのは、電化製品ごとに異なるたくさんのリモコンに囲まれた生活の中、テレビもロクにつけられないことに苛立ちを覚えたため。

店の奥には怪しげな従業員モーティ（クリストファー・ウォーケン）がいたが、マイケルと少し会話を交わしただけでマイケルが善人だと判断した彼は、「善人は相応に報われるべきだ」と主張し、まだ市場に出ていない最先端のリモコンを無償でプレゼントした。

これは隣の家のガキが自慢している「共通リモコン」ではなく、「万能リモコン」という触れ込みだったが、さてその効用は……？ そして、この際モーティが忠告した「返品は不可能だ」との忠告に対し、マイケルは「タダでもらったのだからそりゃ当然だよ」と軽く受け流した……。

この時マイケルは、この万能リモコンによって自分の人生が一変することを知る由もなかったが……。

こりゃ便利！ こりゃ誰でもやみつきに……

家に帰ったマイケルは、早速万能リモコンでテレビをつけることに成功。やっと自力でテレビをつけることができた彼は、さらにこの万能リモコンが、電化製品だけではなく、犬の鳴き声や妻の小言に対しても音量調節ができることを発見して大喜び。

さらに、モーティの指導によって、メインメニューの機能を使えば、過去に巻き戻しできることも未来へ早送りできることも教わった。

この指導中、巻き戻し機能で、彼が過去に戻ったのはまず先週の火曜日。そこでは職場でランチを食べる自分を客観的に分析。次は、何と両親が子づくり（すなわちマイケルを）に励んでいる寝室まで巻き戻し……。ちょっと戻りすぎた彼は、その次は少年時代の楽しいキャンプ場へ。

こんな体験をした彼は、以降、夫婦ゲンカなど面倒な現実は今々と早送りすることができるとに気づき、こりゃ便利と万能リモコンにやみつきに……。しか

し、「好事魔多し」とはよく言ったもの。その後、マイケルはモーティから「返品不可」と言われたことの意味を思い知らされることに……。

問題は自動操縦と操作記憶機能！

ある時、カゼのためセキをしながら設計図づくりに励んでいた彼は、カゼが治るところまで早送りすればいいことに気づき、やってみるとこれが大成功。カゼは治っているわ、設計図は完成しているわ、こりゃ言うことなし……。

そんな中、マイケルは、社長から「この仕事が成功すれば、君も共同経営者に……」という甘言に乗って(?) 頑張っていた。ところが、見事にその仕事を成功させたにもかかわらず、その約束は先送りに……。

そのため、成功を確信して既に家族に買ってあげていたプレゼントは、返品を余儀なくされることに……。

「エイ、クソ！」と唸った彼は、そこで万能リモコンを一気に共同経営者になるところまで早送り……。ところがその場面に直面してみると、何とそれは2カ月の予定が1年もかかっていた。そしてもちろん、その早送りされた1年間はマイケルにとっては空白期間……。

その矛盾点は何とかごまかしたものの、困ったのは、この万能リモコンに自動操縦と操作記憶機能がついていたこと。

そのため、持ち主のマイケルが早送り機能を多用している中、万能リモコンが持ち主の「操作記憶」機能を勝手に使いはじめたから、さあ大変。さて、マイケルが次に早送りされる場面は……？

その後の彼の人生は……？

これ以上ここでマイケルの人生をバラすのはやめておくが、彼がその後もかなり波瀾万丈の人生を送ったことはたしかだから、それはスクリーン上でじっくりと味わってもらいたいもの。

もちろん、マイケルが年を取っていくにつれて2人の子供たちも成長し、ベンは父親と同じ建築士になっていた。また、サマンサも美しい娘に成長し、華やかな結婚式を迎えることに……。

他方、マイケルとドナの夫婦仲はどうも最悪の結果になったらしい……。すなわち、マイケルが社長に就任した頃には、ドナはマイケルと離婚し、ベンの水泳のコーチであったビル（ショーン・アスティン）と再婚していたのだった。万能リモコンの「操作記憶」機能のおかげで早送りさせられることによって、マイケルは、そんなあれやこれやの人生をものすごいスピードで味わわされることに……。

人生訓がいっぱい……？

マイケルの人生がこんなに早送りされる結果になったのは、モーティが言うように、誰が悪いのでもなくマイケル自身の人生観が招いたもの……。すなわち、映画の冒頭に描かれているように、彼は美しく心やさしい妻と2人のかわいい子供たちに恵まれながら、家族との楽しみよりも仕事を優先。おまけに、まともな食事よりもジャンクフードやお菓みに頼る食生活による肥満と病気にも悩まされていた。早送りによる急速な出世は悪いわけではないが、その間に妻との離婚、父親の死亡などの悲しい出来事が次々と起こり、子供たちも遠く手の離れた存在に……。これって一体ナニ……？ 何のためにこんなに人生を早送りしなければならないの……？

人生のラストに至って、やっとそんな単純なことに気づいた彼は、今こそ心の底から「もしも昨日が選べたら」と思ったことだろう……。

そんな人生訓がいっぱいのこの映画が大ヒットしたのは当然だが、ホントに「もしも昨日が選べたら」、あなたは どうする……？ そして、マイケルはどんな人生を選ぶだろうか……？

2006（平成18）年8月16日記